



士別の歴史

士別市は天塩川流域の市町村の1つであり、アイヌ語で「本当の川」を意味する「シペツ〔si-pet〕」が町の名前の由来となっています。

士別市は明治32（1899）年、最北で最後の屯田兵によって「開拓」が始められた町です。

屯田兵がこの土地に来る以前は、北海道の先住民族であるアイヌ民族が生活を営んでおり、安政4（1857）年に、「北海道」の名付け親である松浦武四郎まつうらたけしろうがこの地を訪れ、アイヌ民族と交流をしたことが、武四郎の「天塩日誌」には記されています。

開拓から55年後の昭和29（1954）年に士別町、上士別村、多寄村、温根別村4つの町村が合併して士別市となり、平成17（2005）年には、朝日町と合併し、現在の士別市が誕生しました。

士別の開拓が進められて以降は、林業や農業、デンプン産業、めん羊、文化芸術、スポーツなど、様々な分野でまちづくりが行われ、発展していきます。

